

H. ボーナーの能楽研究 — 外国人の能楽研究における位置づけと概容 —

山 本 百合子

Yuriko YAMAMOTO

音楽教育講座

(平成18年9月29日受理)

はじめに

能が世界遺産に指定される遥か以前から、多くの外国人がこの日本独特の音楽舞踊劇の魅力にとりつかれてきた。能をこよなく愛好して、舞台を鑑賞するにとどまらず自らも謡い舞い囃し、時には外国の詩や文学や伝説を原拠あるいは台本にして能の新作をも手がけた外国人は20世紀前半から目立ち始め、ここ半世紀の間に大変数多くなってきた。こうした外国人の研究活動や上演・創作活動が、日本人の能楽関係者や研究家・愛好家を刺激してきたのは言うまでもない。筆者が初めて舞台を観た外国人による能は、1990年に東京中野の梅若能舞台で上演されたA. マレット作、R. エマート演出および出演の新作能《イライザ》であった。この作品はオーストラリアの原住民アボリジニに伝わる伝説を題材に、翻訳ではなく英語やアボリジニ独自の言葉のままの詞章を用いて、外国人の役者達が日本人能楽師たちに混ざって謡い舞うという舞台で、それまで見慣れていた日本人能楽師による古典的な作品の舞台とは、題材はもちろん、音楽的な響きもかなり異なる衝撃的なものであった。しかしその舞台は、古典作品の定型に慣れるうちにいつしか抱かなくなっていた「能とは何か」という表象上のそして観念上の定義への前向きな疑問を再認識させるとともに、文化的土壌を異にする外国人のもつ能への視点・発想のユニークさ・鋭さへの強い興味を沸き起こさせる力があつた。

その後、外国人による能への取り組みには折に触れ興味を持って接してきたが、数年前ふとしたきっかけで、能楽の研究に勤しんだあるドイツ人の存在を知ることとなった。それがこの拙論で紹介するドイツ人日本学者H. ボーナー (Bohner, Hermann 1884-1963) である。ボーナーは、母国で神学や哲学を学んだ後、中国へキリスト教の伝道教育活動に赴き、赴任先にて東洋への関心を高めて研究に着手した矢先に時代が第一次大戦に突入、ドイツ人俘虜として日本に送られ、戦後は大阪でドイツ語の教師としてドイツ語教育に携わる傍ら日本文化研究に意欲的に取り組み、なかでも能楽の研究においては世阿弥の全伝書をドイツ語に翻訳するという大仕事を成した人物である。

外国人による能楽研究の展開についての研究は、筆者の知る限り、能楽史研究のなかでまだ例が少なく、総括的な調査等に基づく研究や評価は始まったばかりと言えよう。個々の外国人能楽研究者についての調査研究の例も限られているが、最近のものでは2002～3

年にかけて法政大学の西野春雄教授がドイツ人の日本美術史家F. ペルチンスキーとその著作についての詳細な研究^(注1)を発表し、その前後に、外国人による能楽研究・能の翻訳・能の海外公演に関する演題での連続講演会が法政大学での能楽セミナーで開催された。これは、法政大学が文部科学省の「21世紀COEプログラム」の一つとして「日本発信の国際日本学の構築」というテーマを掲げる中で取り組んだ研究で、その成果を集約した『外国人の能楽研究』が法政大学国際日本学研究中心から刊行され^(注2)、外国人による能楽研究についての初めての総括的、集大成的な文献となった。

このような状況の中、本論で取り上げるH. ボーナーとその業績については、今後どれほどの評価が生まれるかは未知数ではある。しかし世阿弥伝書の全訳という注目するに値する大きな仕事を遺しながら、まだ詳細な研究や評価がなされていないH. ボーナーの研究業績を、本論文ではその生涯とともにこれまで知ることのできた範囲で紹介し、外国人の能楽研究について今日把握されている歴史的概略をもとに、今後の研究課題を探ってみたいと思う。

1. 外国人による能楽研究

16世紀後半の桃山時代の日本には、ポルトガル人宣教師を中心とした外国人が数多く滞在し、『日本史』で知られるルイス・フロイス(Frois, Luis 1532-1597)もその著書^(注3)の中で日本の音楽芸能に触れ、能にも言及している。能が大成されて間もない時代からすでに能は外国人の関心を惹いていたことがわかる。しかし、外国人による本格的な能楽研究は、それから300年後の19世紀末になってやっと注目すべき著作の登場を見るようになるのである。その意味でH. ボーナーは外国人による能楽研究の先駆者の一人と言える。

ここでは、法政大学国際日本学研究中心発行の『外国人の能楽研究』における西野春雄による序文、川村ハツエの論文^(注4)、渡辺守章の論文^(注5)をもとに、19世紀末から20世紀半ばにかけての、すなわちH. ボーナーが研究に従事した時代の外国人による能楽研究を、英米系・フランス系・ドイツ系の三つに分けて概観してみる。

(1) 英米系外国人による研究

外国人による研究の初期は、イギリス人とアメリカ人の能楽愛好家や日本文学研究家を中心に展開した。1873年に23歳で来日し、その後日本の言語学に没頭して1886年より東京帝国大学(現東京大学)で教鞭をとったB. H. チェンバレン(Chamberlain, Basil Hall 1850-1935)は、1880年に刊行した『日本人の古典詩歌』(The classical poetry of Japanese)の中で、詩の一種目として能の謡曲を取り上げ、4曲の謡曲の英訳も掲載している。彼の謡曲研究には、幕末から明治に日本に駐在し能をこよなく愛好したイギリス人外交官アーネスト・M. サトウ(Sir Ernest Mason Satow 1843-1929)の協力も大きかったという。また、サトウの同僚のイギリス人外交官で日本学者のW. G. アストン(Aston, William G. 1841-1911)も、1899年に刊行した『日本文学史』(A History of Japanese Literature)の中で能や狂言に言及する章をもうけ、謡曲《高砂》の英訳を掲載している。アストンは、『日本文学史』を刊行する前に『日本書紀』の英訳と『日本古代史』という研究書(ともに1896年)を刊行し、その後『神道』という著書において日本の言語・文学・思想・信仰・風俗・習慣等の日本民族の総合的研究を展開して、ギリシャ・ローマ・エジプトなどの諸外国の神話や伝説との比較研究をも行っているが、そのような研究の展開の道筋は、

ドイツ人日本学者H. ボーナーの場合と比較しても興味深いものがある。

アメリカ人の研究者もこれに続いて輩出している。代表的なのは東洋美術史研究家として有名なE. F. フェノロサ(Fenollosa, Ernest Francisco 1853-1908)である。ハーバード大学で哲学を修め、1878(昭和11)年に東京帝国大学に政治学・理財学・哲学の教授として招聘されたフェノロサは、来日後日本美術に惹かれて日本美術の調査研究に従事しながら、日本の美術界に文化財保護に関する大きな示唆を与えた。彼は仕事の傍ら、観世流の名人梅若実(うめわかつ)に師事して謡と仕舞の稽古に励み、謡曲の英訳も密かに進めていた。彼が書き溜めた50曲におよぶ謡曲の英訳原稿は、彼の生前には発表されなかったが、死後夫人によってアメリカの前衛詩人のE. パウンド(Pound, Ezra Loomis 1885-1972)に託され、パウンドはそのうちの数曲の英訳を完成させて、自らの研究も加え、フェノロサとの共著というかたちで複数の著作(注6)に発表している。またパウンドは、アイルランドの象徴派詩人W. B. イェーツ(Yeats, William Butler 1865-1939)のアイルランド民話収集の手伝いにも携わっており、彼がフェノロサの英訳した謡曲の原稿をパウンドに見せたことが詩人イェーツを刺激し、詩的な舞踏劇《鷹の井戸》(At the hawk's well 1921)を創作せしめた。これはのちに繰り返し改作上演されることになる新作能《鷹姫(鷹の泉)》(横道萬里雄作)の原拠となるのであった。

これらと平行してもう一人能楽研究に業績を残したイギリス人に東洋学者A. ウェリー(Waley, Arthur David 1889-1966)がいる。大英博物館の学芸員だった彼は『源氏物語』や『枕草子』の英訳で有名だが、1921(大正10)年に『日本の能劇』(The Nô play of Japan)という謡曲の翻訳を出版している。この著書は今日ペーパーバックになっているほどよく読まれているものだが、ただし、ウェリー自身は東洋の文学研究に従事しながら終生一度も日本を訪れたことがなく、謡曲の翻訳や世阿弥伝書の紹介などの彼の能楽研究の業績は、高度な語学解釈力と文学的感受性によって成されたものであるのも特徴である。ウェリーはまた、シェイクスピアと並ぶ知名度の英国の劇作家ウェブスター(Webster, John 1580?-1625)の悲劇《マルフィ公爵夫人》という作品を能の台本に仕立てて上演するという創作も行っている。

(2) フランス系外国人による研究

一方、フランス人では1889(明治22)年に来日したカトリック宣教師ノエル・ペリー(Péri, Noël 1865-1922)が1902年に宣教会を脱し、その後20年間能楽研究に没頭し、研究成果の一部を当時発刊されたばかりの日本の雑誌『能楽』の主催者に送り、かなりの紙数にわたって掲載されて(注7)、日本の能楽界を大いに刺激した。彼は能と狂言合わせて10数曲の仏訳も発表、それらの研究の集大成は没後20年を記念して1944(昭和19)年に東京日仏会館より『Le Nô』として改めて出版された。彼の研究はその後続くクロード＝E. メートル(?-1925)、ミシェル・ルヴォン(1867-1947)、ガストン・ルノンドー(1879-1967)、そしてポール・クロードル(1868-1955)らの礎となった。ガストン・ルノンドー(Renondeau, Gaston)は、職業軍人として1909-13年には日本の軍人学校で教鞭を取り、その後駐在武官としてイギリスをはじめ各国を回るなかで1924-28年震災後の日本に再度赴任し、能の仏訳に取り組んで10数曲の仏訳を発表した他、能と仏教(特に日蓮宗)の関係に着目して論じた『Le bouddhisme dans les Nô』を1950年に刊行している。外交官で詩人・劇作家のP. クロードル(Claudé, Paul)は、アメリカ・中国・東欧・ドイツ・南米の各都市の領事館等に勤務した後、1921(大正10)年から27(昭和2)年まで日本に駐在し、雅楽・能楽・歌舞伎・文楽など

の日本の伝統的な芸能全般に触れる中で、能を最も好んで数多くの舞台を鑑賞し、またチェンバレンやウェリー、フェノロサ＝パウンドによる研究やペリーの著書を熱心に研究しながら、能に関する随想を日記や日本文化論『朝日の中の黒い鳥』(L'Oiseau noir dans le soleil levant 1929年刊)などの中に展開している。

(3) ドイツ系外国人による研究

法政大学能楽研究所で2003年7～8月に開催された能楽資料展『世界の中の能—外国人の能楽研究』に著作が展示されたドイツ系の研究者には(最近(1980～90年代)のものを除く)、F. ペルチンスキー(Perzynsky, Friedrich 1877-?), W. グンデルト(Gundert, Wilhelm 1882-1971), H. ボーナー(Bohner, Hermann 1884-1963), P. ウェバー＝シェファー, O. ベンル(Benl, Oscar)らがいる。F. ペルチンスキーは、日本美術史家で蒐集家、著書の殆どは日本や中国の版画などの美術研究であるが、「中国の神々」や「日本の演劇」にも関心が高かったとみえることが論文や随筆のいくつかのタイトルからもわかる。能楽研究としては『日本の仮面・能と狂言』(Japanische Masken: Nô und Kyôgen 1925)という大著が遺されており、独文学者の吉田次郎による翻訳が、西野春雄の詳細な研究を通じて発表された。西野が「発行当時の日本には、これに匹敵する(能面の)研究書は生まれていない」と評する^(注8)内容には、能面作家の系譜という美術史的な研究にとどまらず、能という表象芸術そのものに対する一美術史家の視点もふんだんに読み取れて、外国人が能をどう捉えたかを伝える大変興味深い文献である。

W. グンデルトは、ドイツにおける日本学研究の大家A. フローレンツ(Florenz, Karl Adolf 1865-1939)の後継者として、ハンブルク大学で日本学研究に従事した日本学者である。グンデルトの前任者A. フローレンツは、1889(明治22)年から1916(大正5)年まで東京帝国大学でドイツ語・ドイツ文学や哲学の講義を行いながら日本文学研究に携わり、『神代記』に関する研究により日本で文学博士号を取得している^(注9)。そのフローレンツの影響もあったのか、グンデルトは、著書『Der Schintoismus im Japanischen Nô-Drama』(1925)によって能における神道の影響について論じている。彼は、同じ時代に同じ研究領域を分かち合う同志としてH. ボーナーとは深い繋がりを持っていたようで、1964年、H. ボーナーの亡くなった翌年に、ボーナーの回想記を東洋学の雑誌に発表している^(注10)し、ボーナーは最後に出版された世阿弥伝書「習道書 却来花」の翻訳をグンデルトに捧げている。また能の作品のドイツ語訳に取り組み、1960年代に小町物の5曲をはじめとする謡曲独訳を発表したのがP. ウェバー＝シェファー、またボーナーと同様に世阿弥伝書のドイツ語訳に取り組んだのがO. ベンルである。ベンルは日本文学を古代から現代まで幅広く独訳出版して大いに評価された人物だが、世阿弥伝書の翻訳は7部^(注11)にとどまっている。H. ボーナーについては、詳しく紹介する章を設けているのでここでは省略するが、日本研究に従事したドイツ人の中でも、能楽研究の著作および翻訳の多さという点では、ボーナーは際立っているといえる。

2. H. ボーナーについて

(1) H. ボーナーの生涯

以下の内容は、大阪外国語大学ドイツ語学科の教え子たちによって1984年に開催された『H. ボーネル先生生誕百年記念展示会』の目録^(注12)にある「ボーネル先生略年譜」(以下

「略年譜」と略記)と、チンタオドイツ兵研究会(田村一郎鳴門市ドイツ館々長を中心とした研究者の同好会)のHP^(注13)が高知大学瀬戸武彦教授(ドイツ文学)の調査研究をもとに掲載している「俘虜名簿」の記事(2006年2月更新版、以下「俘虜名簿」と略記)を中心に、その他の文献からの情報も補いながらまとめたものである。

ヘルマン・ボーナーは、1884年12月8日、ドイツのバーゼル福音伝道教会牧師であったフィリップ・ハインリヒ・ボーナーとその妻の二男として、父親の赴任先アフリカのアボコビ(Abokobi, 現ガーナ)で生まれた。「略年譜」によれば、出生地はアフリカではあるが、出身はバーデン-ヴュルテンベルク州とされている。アフリカからドイツへの帰国の時期は定かではないが、シュパイヤー(Speyer)のギムナジウム(中等学校)を卒業後、1903年から07年にかけて、ハレ大学、エルランゲン大学、チュービンゲン大学で神学と哲学を学び、教職資格を取得し神学試験に合格して、1907年からハウビンダ(Haubinda)にある特殊学校で教職に就き、その学校の設立者で教育者のH. リーツ(Lietz, Hermann 1868-1930)の影響を受けた。1911年にはストラスブルク大学でゲルマニスティク(ドイツ学・ドイツ文学・ゲルマン法学)とヘブライ学の国家試験に合格、1914年にエルランゲン大学で哲学博士の学位を取得の後、「統合福音派海外伝道教会」(A E P M)の派遣伝道師として中国の青島に赴き、ドイツ人学校の教師と伝道活動とに従事するようになるが、同時に在青島のドイツ人伝道師で中国学者のR. ヴィルヘルム(Wilhelm, Richard 1873-1919)の下で中国語と中国学の研究に取り組み始める。青島で第一次大戦勃発を迎えて応召し、海軍歩兵第3大隊第6中隊に配属されるが、日本の青島戦参戦後、俘虜として日本のドイツ人俘虜収容所へ送られ、俘虜時代は松山俘虜収容所から板東俘虜収容所へ移動、1918年11月ドイツ休戦条約調印を経て、1919年から1920年にかけての俘虜解放の時期まで、約6年間に日本を四国でドイツ人俘虜として過ごした。解放後には再度中国の青島へ赴いて2年間伝道活動と中国学研究に従事するが、1922(大正11)年4月より、その年に設立された大阪外国語学校の講師として日本へ赴任し、ドイツ語・ドイツ文学の教師としての教育研究活動と並行して、東洋研究においては中国学から発展した東アジア研究＝日本学へと研究領域を移行し、日本の神学・古代文学・古代人物の研究や翻訳、現代演劇や小説の翻訳、世阿弥と能の研究へ展開していったのである。大阪外国語学校着任の翌年1923年には、青島のR. ヴィルヘルムのもとで知り合ったヴィルヘルム夫人の妹ハンナ・ブルームハルトをドイツから迎えて結婚。その後大阪外国語大学と名が変わった同大学に1963(昭和38)年6月24日に逝去するまでの41年間勤務し、その間1937年の契約満期による一時帰国を含む2度しか母国ドイツへは帰国しなかったという。1932(昭和7)～47(昭和22)年には旧制浪速高等学校(現大阪大学教養学部)の講師も兼任、また第二人もドイツから来日し、高知や松山の高等学校の教師として勤めている。

(2) H. ボーナーの研究の展開

ボーナーの研究は、学生時代から始まる神学やドイツ学、青島赴任以降の中国学、そして日本へ移ってからの日本学、ドイツ語教師としてのドイツ語教材とドイツ文学の研究、といった多岐に渡っているが、ボーナー自身が1955(昭和30)年に自らの主要著作目録を作成しており^(注14)、その中では研究全体が次の6種に分類されている。

- A. 歴史的なもの
- B. 世阿弥と能
- C. 種々の翻訳

D. 現代日本の演劇

E. 現代日本の小説

F. その他ドイツ語学教材 など

しかし、その目録には当然ながら1955年以降に発表された著作や未発表の研究は反映しておらず、また1955年以前の著作に関しても網羅はされていないようである。そこで、ボーナー自作の著作目録をもとに、八木浩の論文「H・ボーネルと今日の日本学の課題」^(注15)の末尾にまとめられたボーナーの著作の一覧と、「生誕百年記念展示会」の目録等を通じて、1955年以降の著作等を補い、また本論の趣旨から能楽研究の位置づけがより明確化するように4分類化して年代順に整理したのが、【表1】である。

【表1】 H. ボーナー 日本・東洋研究 著作一覧

注1：日本の歴史書や諸資料については翻訳と研究が一体となっているものが多く、この表中のタイトルは括弧を省いた

注2：世阿弥の伝書の翻訳は「」を、能作品の翻訳は《》をつけ、研究論文については括弧を省いた

注3：現代日本の演劇・小説などの翻訳については、タイトルに『』を用いた

年代	日本の歴史書や諸資料の翻訳と研究 ^{注1}	世阿弥と能に関する翻訳と研究 ^{注2}	現代日本の演劇・小説等の翻訳 ^{注3}	その他 日本・東洋文化研究や随筆
日本研究 第一期				東アジア学考(1917～18?)
	1923			芦屋
	1924		武者小路実篤『西伯と路上』	
	1929			日本の理神論 日本の教育制度 仏教の日曜学校歌
	1931		山本有三『てておや』	日曜学校の新経営法
	1933		岡本綺堂『大阪城』 武者小路実篤『仏陀と孫悟空』	日本の学校で活躍するドイツ人の仕事 軽井沢の夏休み
	1934 日本国現報善悪霊異記			ゲーテとシュテファン・ゲオルゲ
	1935 神皇正統記 第一巻		山本有三『本尊』	
	1936 聖徳太子		鈴木泉三郎『二人のやもめ』	アッシリアと中国・朝鮮のおみな
	1938 花園天皇 鶏と時計		菊地寛『恋愛結婚』 『笛吹きの話』	
日本研究 第二期	1939 神皇正統記 第二巻 田村麻呂伝記		田島淳『夕立』 佐々木邦『運』	
	1940 和気清麿伝		佐々木邦『珍太郎日記』	
	聖徳太子 鎌足伝 隠岐伝説 伊勢詣			
	1942 聖徳太子研究完成記念講演 武智麿伝 橘逸勢伝			鏡・剣・宝石 日本の童話と歴史
	1943 弘法大師伝 長谷雄卿	「至花道書」 「九位次第」		茶室掛物 禅語通解 武士の道
	1944			関が原の戦い
	1953	「花鏡」第一部		
	1954	「花鏡」第二部 「能作書」	岡本綺堂『戦後』 岡本綺堂『太閤年代記』より 武者小路実篤『耶穌—28才のイエス』 武者小路実篤『一休の一日』	
	1955	能の形象と根源		
日本研究 第三期	1956	能—その諸作品		
	1957 本朝神仙伝			
	1959 女院小伝	能—入門		
	1961	「習道書 却来花」		
	1966			日本の陶器 日本庭園成立史
	1969			奈良
	遺稿（未出版）	「花伝書」 「五音曲条々」 「夢跡一紙」 「曲附書」 「金鳥書」 「音曲聲出口傳」 「風曲集」 「遊楽習道風見書」 「二曲三体絵図」 「五音」 「世子六十以後申楽談義」 《敦盛》	『舌切すずめ』 『地藏伝説』 その他伝説 約1000編	日本の風物 象徴と神話

ボーナーの大阪外国語大学の教え子でドイツ文学者の八木浩は、ボーナーの日本研究を、中国学から日本語・日本研究に移行してその最初の成果が発表された1935年頃までの第一期、第二次大戦のさなかに「形象的なもの、人格的なものへの指向」が感じられる1945年頃までの第二期、「日本人のもっとも内実に達し得た」と言える能研究の第三期、という三つに区分している。能楽研究を彼の研究のある種の到達点と考えるこの時期区分に則りながら、能楽研究への道筋としての研究の流れをたどってみたいと思う。

① 日本研究第一期前半（研究の初期）

ボーナーの東洋研究は、中国青島でのヴィルヘルムとの出会いから本格化した。中国研究のまとまった著作は発表されていないようである。青島での研究は伝道活動を本業に据えながらの研究活動初期の段階にあり、また第一次大戦の勃発により軍の仕事にも従事していて、その後捕虜としての生活も強いられた境遇にも関連しているだろう。大戦終結の数年後、1922年に大阪外国語学校の講師に着任するとその著作の発表が始まるが、最初期の「東アジア学考」は、俘虜時代に収容所生活の中で中国語・日本語の語学学習や文献講読を推進したり、俘虜たちの教養の場としてドイツの詩や歌や戯曲などの文学や哲学・芸術・美術・音楽をテーマに講義を行った時の資料を、後にボーナー自身が母国のファルツの地域図書館に送り、さらに後に東亜学会が出版したものらしい^(注16)。残念ながらこれは資料の現物をまだ見ていないため詳しい内容が未確認なのだが、1917年4月から1919年9月までの板東俘虜収容所の日誌『ディ バラック』(Die Baracke)^(注17)の記録からボーナーが行った講演の記録を抜き出してみると(【表2】)、講義に関しては連続講義「ドイツの歴史と芸術」が大半を占めており、東洋・日本研究の内容がどの程度含まれるかはわからない。しかし、板東俘虜収容所時代の講義の内容にある詩や戯曲や音楽への関心が、のちの日本研究における現代演劇・小説の翻訳研究や世阿弥と能の研究に無関係でないことは明らかである。

日本研究第一期の前半、『神皇正統記』や『聖徳太子』といった本格的な歴史書研究の発表に先立って発表された研究には、「日本の理神論」(1929)のような彼の専門領域の一つであった神学や哲学の日本を題材とした概論的展開を思わせるものや、「日本の教育制度」(1929)・「日本における外国語教授の原則」(発表年代不詳、1930頃か?)といった外国人教師としての立場や経験をもとに書かれたとみられる教育制度等についての研究がみられる。ちなみに、【表1】の目録では省いたドイツ語教材関係の著作として1928年に三島書房から『Fragen und Übungen』という教材が出版されている他、ドイツ語ドイツ文学教師ボーナーの教え子たちの話に拠れば^(注18)、ボーナーの講義には、毎回、発音や文法や文学的内容の伝達のために充分吟味研究された多くの詩や民謡が古典現代を問わず多数引用され、当時は決して容易く入手活用できなかったレコード・カセット・フィルムなどの視聴覚教材も利用されたという。大阪外国語学校赴任当初はこうしたドイツ語ドイツ文学教材の研究へも力が注がれていたに違いない。この日本研究第一期前半期のボーナーは、日本の学生たちの前で教育者として何をするかという課題に、真摯に取り組んでいる一方で、その後1930年代半ばに次々と発表されていく日本の歴史書や諸資料の翻訳や研究、現代日本の演劇や小説の翻訳も着々と進められていたと思われる。

【表2】 H. ボーナーの板東俘虜収容所での講演演題一覧

年	月	日	演 題	備 考
1917	11	4	『ミンナ・フォン・バルンヘルム』について	11月6～9日の『ミンナ・フォン・バルンヘルム』上演に先立つ講演
	11	10	シラー『鐘』について	11月11日の『鐘』演奏に先立つ講演
	12	1	ドイツの歴史と芸術（以下、1918年5月18日まで連続講義）	
	12	5	ドイツの歴史と芸術	
	12	8	ドイツの歴史と芸術	
	12	16	ドイツの歴史と芸術	
	12	19	ドイツの歴史と芸術	
	12	27	ドイツの歴史と芸術「ハンス・ザックスのタバ」	
	12	29	ドイツの歴史と芸術『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』の名場面	
1918	1	2	ドイツの歴史と芸術	
	1	5	ドイツの歴史と芸術	
	1	9	ドイツの歴史と芸術	
	1	16	ドイツの歴史と芸術	
	1	19	ドイツの歴史と芸術	
	1	23	ドイツの歴史と芸術	
	1	30	ドイツの歴史と芸術	
	2	2	ドイツの歴史と芸術	
	2	6	ドイツの歴史と芸術	
	2	9	ドイツの歴史と芸術	
	2	13	ドイツの歴史と芸術	
	2	20	ドイツの歴史と芸術	
	2	23	ドイツの歴史と芸術「ペーター・スクヴェンツのタバ」	
	3	2	ドイツの歴史と芸術「愚者文学 1525年(農民戦争)」	
	3	9	ドイツの歴史と芸術「宮廷的教養の詩と即興劇」	
	3	13	ドイツの歴史と芸術「デ・コスター、ウーレンシュピーゲル(1)」	
	3	16	ドイツの歴史と芸術「デ・コスター、ウーレンシュピーゲル(2)」	
	3	20	ドイツの歴史と芸術「三十年戦争の原因」	
	3	23	ドイツの歴史と芸術「三十年戦争 Phil.v.ジッテヴァルトの「物語」から」	
	3	27	ドイツの歴史と芸術「諸芸術における輪郭」	
	3	30	ドイツの歴史と芸術「バッハ、ヘンデル」	
	4	10	ドイツの歴史と芸術「啓蒙主義の考察」	
	4	13	ドイツの歴史と芸術「シェイクスピアについて(1)」	
	4	17	ドイツの歴史と芸術「J. S. バッハのブランデンブルク協奏曲第3番ト短調」	
	4	20	ドイツの歴史と芸術「シェイクスピアについて(2)」	
	4	27	ドイツの歴史と芸術「シェイクスピアについて(3)」	
	5	1	ドイツの歴史と芸術「シラー『ヴァレンシュタインの陣営』」	
	5	8	ドイツの歴史と芸術「シェイクスピアについて(4)」	
	5	11	ドイツの歴史と芸術「シェイクスピアについて(5)物語詩」	
	5	18	ドイツの歴史と芸術「カルデロン『人生は夢』」	5月22日の『人生は夢』上演に先立つ講演
	5	28	ベートーベン『第九交響曲』について 第1部	6月1日の第九演奏会に先立つ講演
	5	30	ベートーベン『第九交響曲』について 第2部	

② 日本研究第一期後半（神話と天皇の解明）

ボーナーが研究対象に取り上げた日本の文学は、1940年代になって発表される世阿弥伝書の研究の前までは、大きく古代文学と現代文学の二本柱となっている。研究の発表に言えば、現代の演劇や小説の翻訳の発表の方が歴史書や諸資料の翻訳研究よりも早く実現しているが、『神皇正統記』『聖徳太子』などの研究が甚だしい規模の大著であることを思えば、発表にこぎつけるまでの労作は想像に難くないから、彼の関心と研究活動において両者が平行していたと考えて差し支えあるまい。牧師の息子として生まれて神学や哲学を修め、自らも伝道師として中国そして日本へ渡ってきた時から、彼の中には、日本人が何に神を見出し、何を聖なるものと感じているのか、という疑問や関心が高かったと窺える。そして、『日本国現報善悪霊異記』『神皇正統記』『聖徳太子』の研究には、そうした疑問や関心への答えをまず「神話」や「天皇」の中に模索したことがわかる。ただ、八木浩が指摘しているように^(注19)、1930年前後の日本が軍国主義や皇国史観のイデオロギーに覆われ、国が『神皇正統記』のような古代文学を高く掲げていたという背景の影響も否めないようである。ボーナーが「天皇」や「聖徳太子」そして神話や伝説の中の神々に対し、それを肯定的に捉えたか否定的に捉えたかはともかくとして、彼の日本研究の出発点は日本における「神なるもの、聖なるもの」の一端を解明することにあったのは確かである。

③ 日本研究第二期（神格化される人物像の探求）

続いて彼が関心を寄せていったのは、古代史の中で神聖視された人物像である。この時期に次々と翻訳と研究の対象にされていった人物名を見ると、そこに少なからず能の主人公にされている人物を見つけられることは大変興味深い。「田村麻呂」は多くの古典文学の中で悪霊退治や神仏の信託・加護の逸話を持ち、能《田村》の主人公にも登場する坂上田村麻呂であるが、能《田村》は、武勇伝的な内容から修羅能に分類されながらも、前場に登場する主人公の化身(前シテ)が通常は神仏の化身に使われる童子であるところに、田村麻呂信仰とでも言える古代における英雄の神格化が際立つ能である。また「和気清麿」は古典的な現行曲ではないものの、昭和前期に多数の新作能を発表した土岐善麿の1942(昭和17)年発表の新作能の題材にされた人物で、能では、清麿が、皇位継承をめぐる策略を見破り、八幡信仰の信心深さと正統な皇位継承への忠義から阻止する物語の中に、清麿の宗教的な超能力が描かれている。この新作能は第二次大戦の真只中に創作・初演されているわけだが、当時は時局柄、尊王的・軍国主義的な題材の新作能が数多く作られて上演されており、土岐善麿は1939(昭和14)年には聖徳太子を主人公にした《夢殿》という新作能も発表している^(注20)。1930から40年代の日本が重視していた天皇とその系譜への宗教的な信仰や崇拜は文学や芸能の世界にも大きく影響を与えていたわけだが、なかでも能は、宗教儀式的な起源に由来しながら一方で生々しい人間ドラマの哲学という題材をも扱うその文学的題材の傾向と演劇としての形式が、神あるいは神格化したものと現実の人間との橋渡しとして、うってつけの媒体であったともいえる。ボーナーの研究が、古代の「神話」や「天皇」から、神格化される人物へ、そして能へと移って行く背景には、能のもつこうした特性も無関係ではあるまい。

④ 日本研究第三期（世阿弥伝書の翻訳を中心とした能楽研究）

第二期後半の1942～3年に発表された研究には『弘法大師』『茶室掛物 禅語通解』『武士の道』などといった中世を特徴づける武士や仏教・禅にかかわる題材が現れてくる。ボーナーの研究対象は、古代的なものから中世的なものへ、神話的な神秘の世界から仏教的な哲学の世界へ、皇統に関するものから武士の生き様へ、文学から演劇へと、その性質を移行していつている。もっとも、能楽研究において彼がもっとも関心を寄せたのが能のどのような部分であったのかをその著作から詳細検討しなければ、能のなかに本当に中世的なものを探求していたかどうか断言はできないが、全伝書の翻訳に対して、全訳としてはたった一曲のみ見つかっている謡曲作品本文の翻訳が、神能(脇能)や王朝的なものではなく《敦盛》であるところも見逃し難い。第二次大戦中の1943年頃から1963年に亡くなるまでの約20年、発表されずに原稿のまま終っている研究も含めれば、彼の能楽研究は、世阿弥の全伝書16部の翻訳と3部の研究書である。ボーナーは研究において常に原典を詳細に読み解くことを重視していた、と多くの隣人や教え子が述べているように、能楽研究においても、理論や思想のおおもとである世阿弥伝書の原典を全て読み解き明かすことは必要不可欠な作業だったのかもしれない。全部が出版こそされなかったが、世阿弥の伝書全てを読んで初めて、彼は謡曲作品の翻訳にも取り組めたし、能についての入門書を記すことができたのかもしれない。

(3) H. ボーナーの能楽研究の位置づけと課題

ボーナーの能楽研究の著作について、独訳タイトルや発行元を添え、年代順に一覧にま

【表 3】 H. ボーナー能楽研究一覧

発表年代	翻訳・研究書タイトル	独訳タイトル	発行
1943	「至花道」	Buch von der Hochsten Blume Weg	OAG(独乙東亜細亜研究協会)
	「九位次第」	Der Neun Stufen Forge	OAG
1953	「花鏡」第一部	Blumenspiegel 1	OAG
1954	「花鏡」第二部	Blumenspiegel 2	OAG
	「能作書」	Buch der No-Gestaltung	OAG
1955	能の形象と根源	Gestalten und Quellen des No	大阪外国語大学学報→OAG
1956	能—その諸作品	No Die einzelnen No	OAG
1959	能—入門	No-Einführung	OAG
1961	「習道書 却来花」	(Shu-dosho, Kyakurai-kwa)	OAG
未発表 (年代不詳)	「花伝書」	Buch von Der Blume Überferung	
	「五音曲条々」	Die funf Tonspiegelweisen	
	「夢跡一紙」	Traumes Spur, ein Blatt	
	「曲附書」	Buch der Komposition	
	「金島書」	Gold-Eiland-Buch	
	「音曲聲出口傳」	Mundliche Tradition über den Gebrauch der Stimme im Musikstück	
	「風曲集」	(Fu-Kyoku-Shu)	
	「遊楽習道風見書」	(Yugaku-Shudo-Fuken-Sho)	
	「二曲三体絵図」	Weisen und Drei Typen, Illustreirt	
	「五音」	Die funf Arten No	
	「世子六十以後申楽談義」	Ze-Shi's Des-Über-sechzigjährigen-Gesprache über Sarugaku, von Hada Motoyuki gehört und auf-gezeichnet	
	《敦盛》		

とめたのが【表 3】である。

繰り返しになるが、ボーナーの能楽研究の中心は世阿弥伝書の全ドイツ語訳であった。原典に忠実に翻訳することを極めて重視していたというボーナーは、一体どのような解釈と表現で独訳をしたのだろうか？時代を若干前後して発表されたO. ベンルの世阿弥伝書の独訳7部との比較も含め、外国人特にドイツ人が能楽をどう感じ捉えたかを知る上で、彼の著作が大変貴重な資料であることは間違いない。世阿弥伝書の内容の受け止め方は日本人の能楽関係者の中でも意見の分かれることがある。世阿弥の芸術論の新たな解釈の一端が彼の研究を通じてさらに明らかにされるかもしれない。また、彼の研究には、神学者・哲学者・ドイツ語ドイツ文学者としての見識や感性も反映しているであろうし、なかでも彼が中国から日本へと移り住み、中国学から日本学へと研究を展開して、終生日本に暮らし続けたなかで持ち続けてきたと思われる「日本における聖なるもの・神なるものの追究」や「東洋において人はどのような道を進もうとしているか」という求道の問題に対する答えも探ることができるかもしれない。二つの大戦の狭間で、日本国の軍国主義と天皇信仰の色濃い時代に、日本人の宗教的な精神世界の揺らぎと膨らみを、能という音楽芸能の中に見出した思考の展開も興味深い。こうしたことは、彼が遺した3部の能楽の研究書の中に、より読みとれることであろう。例えば、『能・その諸作品』においては、ドイツ人劇作家ブレヒト(Brecht, Bertolt 1898-1956)が戯曲《ヤーザーガー》に翻案した能《谷行》について、ボーナーは「救済」というテーマのあり方に独自の解釈や方向性を述べている。能《谷行》はブレヒトの戯曲化の影響を受けてその後日本でも物語の展開や演出の仕方に様々な変化があった作品で、外国人の解釈が能の原作に大きな影響を与えた例であ

る。能のもつ宗教性、宗教的な動機や題材と能の関わりに関心の高い筆者としては、極めて興味を惹かれる作品なのであるが、こうした作品に着目言及しているボーナーの作品論やその他能楽全般にわたる論述は、いつか全訳される必要を感じる。

しかし、これらはボーナーが残した膨大なドイツ語文献を、高度なドイツ語力と神学・哲学・独文学の知識を持って解釈しなければならない大変な課題である。今後の日本の能楽史研究において、他分野との学際的な取り組みも行いながら、こうした外国人による能楽研究の解釈を通じて、従来の日本国内の能楽史研究だけからは見えないような能の本質や普遍性を浮き彫りできたとしたら、能の国際的な楽劇としての可能性にも大きな影響が生まれるかもしれない。

おわりに

H. ボーナーの存在を初めて知ったのは、6年前の春、知人を訪ねて徳島を旅行し、友人の案内で鳴門市の板東にある「ドイツ館」を見学した折である。ドイツ館とは、第一次大戦後にドイツ人俘虜を収容していた板東俘虜収容所を記念して建てられた記念館で、板東俘虜収容所は、ドイツ人俘虜と地域の日本人達の他に例をみない友好的な関係により、ドイツ人がパンや菓子やソーセージなどの西欧の食文化、音楽・美術・詩・演劇などの西欧の芸術文化を紹介して交流を深めたことで知られている。なかでもベートーベンの第九交響曲が日本で初演されたのがこの収容所の俘虜たちの結成する楽団であったことが、ちょうど私が見学に訪れた頃にクラシック音楽愛好者たちの間で話題になり始めていたと思う。しかし、展示品のなかに、その時私は別の二つの発見をし、ドイツ館を偶然にも訪れたことに不思議な縁さえも感じた。その二つの発見とは、一つは多分に私的なことだが、板東俘虜収容所でリーダー的な立場にあり、収容所生活と日独交流への貢献が展示にも少なからず取り上げられていた一人の俘虜が、ドイツ系商社に勤務してドイツ駐在も長かった私の祖父と親交の深かった友人であったこと、そしてもう一つは、俘虜たちのなかに、日本研究に従事し、日本の音楽芸能に関する様々な著作を残している人物がいたことであった。俘虜たちのなかで日本音楽研究をした人物は、実はH. ボーナーの他にもう一人いる。それはJ. バート(Barth, Johannes 1891-1981)で、能の研究に打ち込んだボーナーに対し、バートは歌舞伎を好み、ボーナーと同様俘虜解放後も長年日本に暮らし、日本人の妻を迎え、日本の伝統音楽(芸能)全般にわたる大著を残していたのである。

日本に俘虜として滞在したドイツ人たちの多方面からの研究は、近年着々と進められている。捕虜当人の家族たちが少しずつ減っていくなかで、遺品や記憶を何とか少しく記録にとどめていきたいと思う関係者が多い。H. ボーナーやJ. バートは俘虜の中では、解放後の経歴などからも比較的調査の進められている方ではあるが、日本学研究に勤しんだ後半生時代の両氏の日本音楽との関わりを知ることのできる記録…例えば手記や書簡のようなものもまだ未発見のものがありはしないだろうか？またドイツ人の日本学は、盛んと言っても、ドイツでの日本の伝統音楽芸能の理解度はまだまだ低いという。歌舞伎や能などの日本の音楽劇が世界的な評価を高めている今日、半世紀近く前のドイツ人たちの日本の音楽芸能研究は非常に興味深い。外国語力の乏しい筆者にとっては幻のような研究課題であるが、この出会いをきっかけに、日本の伝統的な音楽芸能についての外国人の受容を僅かずつでも調査研究し、解明してみたいと考えている。

注

- (1) 西野春雄「日本美術史家フリードリッヒ・ペルチンスキー研究(1)(2)(3)」『能楽研究』26・27・28号(法政大学能楽研究所紀要)(2002～3年)
- (2) 野上記念法政大学能楽研究所編『外国人の能楽研究』(21世紀COE国際日本学研究叢書1)法政大学国際日本学研究センター(2005年3月)
- (3) フロイス著『ヨーロッパ文化と日本文化』
- (4) 川村ハツエ「先駆者たちが見た能楽」前掲『外国人の能楽研究』17～41p.
- (5) 渡辺守章「クローデルと能」前掲同書 117～139p.
- (6) *Certain noble plays of Japan*. 1916 London
- (7) 『能楽』大正2(1913)年1月号付録
- (8) 前掲『外国人の能楽研究』191p.
- (9) 前掲西野論文(1) 228p.
- (10) Gundert, Wilhelm *Hermann Bohner zum Gedächtnis*. In *Oriens Extremus* 11.Jahrgang, Heft 1 (Juli 1964)
- (11) Benl, Oscar *Überlieferung des Nô : Aufgezeichnet von Meister SEAMI*. Insel Verlag, Frankfurt am main 1961 に『花鏡』『至花道』『二曲三体人形図』『遊楽習道風見』『九位』『夢跡一紙』の7部の翻訳が収められている。
- (12) ヘルマン・ボーンル先生の業績を讃える会(大阪外国語大学ドイツ語学科研究室)編『ヘルマン・ボーンル先生 生誕百年記念展示会 (目録)』(1984年11月)
- (13) <http://homepage3.nifty.com/akagaki/indexb.html>
- (14) Bohner, Hermann *Arbeiten und Veröffentlichungen Ostasien Betreffend*. Osaka-gaikoku-go-daigaku 1955
- (15) 八木浩「H・ボーンルと今日の日本学の課題」『日本語・日本文化』第4号(大阪外国語大学ドイツ語ドイツ文学科)(1975年)
- (16) 前掲八木論文 7p.
- (17) 鳴門ドイツ館資料研究会訳『ディ・バラッケ(*Die Baracke*.)-板東俘虜収容所新聞-』第1～4巻(平成10～16年)
- (18) 熊谷俊次郎 他「ボーンル先生をしのんで」『*Sprache und Kurt* vol.5』(大阪外国語大学ドイツ語研究室会報 第5号), 「特集・外国人の先生方について」『旧制浪速高等学校同窓会報 第17号』(平成4年10月), 他
- (19) 前掲八木論文 9 p.
- (20) 山本百合子「土岐善麿の新作能における「宗教」をめぐる試論」『福岡教育大学紀要』第50号(平成13年)